

日本フィル「被災地に音楽を」

訪問コンサート レポート 第43号

被災地支援の訪問演奏は、2011年4月から始まり、2019年1月現在、通算263回となりました。



訪問地 福島県

2018年10月2日(火) 双葉郡富岡町 会場:富岡町文化交流センター 学びの森

10月3日(水) 田村郡三春町 会場:御木沢小学校 体育館

双葉郡葛尾村 会場:葛尾小学校・中学校 体育館

10月4日(木) 田村郡三春町 会場:三春交流館まほら

訪問メンバー

ヴァイオリン 九鬼明子 / 豊田早織

ヴィオラ 高橋智史

チェロ 山田智樹

2011年の6月からこれまで4回三春町を訪れました。昨年初訪問の葛尾村に続き、5回目を迎えた今回は、三春町の小学生と地域の方々、葛尾村と富岡町では小中学生、そして地域の方々に音楽をお届けいたしました。各校に希望を尋ね、メンバーが少しずつ異なるプログラムを組んでいます。

富岡町 10月2日(火) 富岡町学びの森



震災後、初めて富岡町を訪れました。会場となった富岡町立文化交流センター学びの森は町役場に隣接する複合施設で、2017年4月に再開。富岡町の小学校2校、中学校2校が富岡町立富岡小中学校となり、2018年4月に7年ぶりに再開しました。現在は20名前後の児童生徒が在籍しているそうです。

もともと演奏を予定していた学びの森小ホールの扉の向こう側に、テラスのような野外堂がありました。ご担当者によって扉が開けられると、目の前に豊かな木々と木材のステージがあり、とっても開放的で気持ちのいい空間。試しにチェロの山田が音を出してみるとこれがよく響く。この日は天気もよく、メンバーで相談し、今回は急きょこの野外堂で演奏しました。

富岡町の石井教育委員長によると、2018年10月現在700名程の町民が戻ってきており、その半分以上は高齢者です。「子どもたちに、ぜひプロとしてのカッコいい姿を見せてください」との話がありました。全員で「もみじ」の合唱や、子ども達の「ビリーブ」の歌声が響くと、涙される方もいらっしゃいました。郡山駅から車で1時間半強の道のりとなり、郡山から東に国道288号線のルートと、高速でいわきまで戻って北上する2つのルートがありました。時間としてはほぼ同じのことですが、運転手と相談の上タイトなスケジュールや楽器を考慮し、高速のルートを採用。結果的に身体への負担は下道より少なかったと思われます。

葛尾村 10月3日(水)午後 葛尾村立葛尾小中学校

葛尾村は三春町と富岡町の間くらいに位置します。震災後、富岡町と同様に三春町に分校が開講しましたが、2018年3月に閉校となり、同年4月に葛尾村にて小学校と中学校が同じ校舎で再開しました。小学校中学校合わせて児童生徒は17名です(2018年10月時点)。学校のすぐ近くには、葛尾村復興交流館が、地域の方の交流の場、また情報収集の場として拠点として同年6月にオープンしたそうです。



コンサートでは全員合唱のほか、指揮者体験では3名の児童生徒に指揮してもらい、「緊張したけれど楽しかったです」と感想をいただきました。

校舎には様々な多目的室があり、学校を核とし地域の方が集まる場を目指しているそうです。

はじめは御木沢小学校の児童と近隣の復興住宅の方を対象にしていたのですが、御木沢小学校の提案で、富岡小三春分校の児童と合同で演奏を聴いていただくこととなりました。このコンサートをきっかけに、今後富岡小三春分校と御木沢小の2校は授業においても交流をしていくそうです。この活動を通して子どもたちの交流が生まれるのは嬉しいかぎりです。

指揮者体験ではそれぞれの学校から体験いただき盛り上がり、全員合唱もとても元気な歌声が体育館いっぱいに響きわたりました。また、楽器紹介のあとの質問コーナーでは、「チェロは重いのですか」など、楽器についての質問がたくさん出て、それに答えるように楽員も近くまで楽器を見せたり触ってもらったりする場面もありました。



指揮者体験



三春町には、400席ほどの室内楽専門ホールがあります。この会場ではこれまでに3度演奏しています。内の小学校音楽鑑賞教室として、昨年はサン＝サーンスの《動物の謝肉祭》を、今回はカルテットでの出演となりました。恒例の「ビリーブ」、そして今回初めて演奏する忍たま乱太郎「世界が一つになるまで」の全員合唱はとても元気のいい歌声がホールに響きました。400席のホールにもかかわらず、曲当てクイズでは、児童が勢い良く答えました。

これらの学校間、日本フィルとの間を取り持ってくくださったのが、三春町立岩江小学校の遠藤校長先生です。今回の特別寄稿は遠藤先生にお願いしました。



《ビリーブ》を歌う様子



なぜに日フィル？ 福島県三春町立岩江小学校長 遠藤俊一

オーケストラ？ 交響楽団？ 弦楽四重奏？ 私にとって身近な存在からはほど遠く、憧れのボキャブラリーであったことは揺るぎない事実。音楽は「聴くもの」。当たり前のことではあるが、その固定観念を脱却させてくれたのが、「日フィル」。

さて、私と日フィルとの関係は？ 深いようで浅いようでなんとも表現し難い。今から7年と半年前、東日本大震災まで遡る。地震、津波、そして福島第一原子力発電所事故の影響から、私が勤務する学校のある三春町には、多くの方々が避難されていた。

平成26年4月、私が初めて校長として赴任した学校が、福島第一原発から20km圏内にあるK小学校。子どもたちの半分以上が避難しているため、同じような境遇にある4つの小学校が市内の仮設のプレハブ校舎で肩を寄せ合い教育活動を行っていた。仮設住宅や借り上げ住宅からスクールバスで通ってくる子どもたちは震災を忘れたかのように元気いっぱい。しかし、時々見せる寂しそうな仕草や目が、決して忘れてはいないことを十分に物語っていた。またもや、「音楽の力」で目の前の子どもたちを少しでも勇気づけたいという思いが湧き上がってきた。いてもたってもいられず日フィルへ電話する。突然の電話にも関わらずうれしい返事が。またもや不思議な縁が始まる。日フィルの皆さんは、震災以降、同市の小学校や中学校へ、ボランティア演奏やクリニックに来てくださっていたことをこのとき初めて知る。色鮮やかな映像をバックに演奏とお話による「動物の謝肉祭」。そして、演奏に合わせて参加者全員で歌った「ビリーブ」「ふるさと」。スクリーンに映し出された子どもたちの生き生きとした表情、ふるさとの風景。音楽の魔力がここでも顔を出す。

2年後、三春町に戻った私が勤務したのが、震災後多くの避難している子どもたちを受け入れていた学校。またもや、断られるのを承知で日フィルに電話をする。そんな甘い話がいつまでも続くはずはないと自分に言い聞かせながらあきらめ半分でお願いすると、なんと、これまたうれしい返事が。関わってくださる日フィルの皆さんが毎回神様のように思えてくる。子どもたちと音楽をなんとかして繋ぎたい、そして勇気づけたいという思いが湧き上がるといつもそこには日フィルの皆さんが。そしてゴージャスな「音楽の力」で応援してくださる。演奏に合わせて身体を動かす子、食い入るように演奏に聴き入る子、静かに流れる小川のような演奏についウトウトしてしまう子。そんな子どもたちの表情が私は大好きである。演奏と同時にその音楽の裏にある様々な思いが一人一人の子どもたちの心に響き渡る。

日フィルの皆さんとの出会いは、音楽は「関わるもの」そして「紡ぐもの」という新しい思いをいつも私の中に起こさせてくれる。感謝してもしきれない。関われることこそ、私のアイデンティティ。そして、新たな始まりの第一歩。